



TITLE:

安藝の名[勝]二級峽及白糸瀧(一)

AUTHOR(S):

吉野, 益見

CITATION:

吉野, 益見. 安藝の名[勝]二級峽及白糸瀧(一). 地球 1937, 27(4): 281-296

ISSUE DATE:

1937-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184676>

RIGHT:

月間通じなかつた道が漸く開いたのであるといふ。因みに、このやうな大雪は今から百五年前にあつたとの記録が、春日谷香六、小宮神の寺

の記録にあるとのである。

(昭和十一年九月十五日稿)

安藝の名勝二級峽及白糸瀧 (一)

吉 野 益 見

目次

緒言

總説

一、地形 二、地質 三、名稱及區域

各説

一、上段峽

A、弧狀曲峽 B、東西直峽 C、南北直峽

二、二級瀧

A、上段瀑 B、狭間峽 C、下段瀑

D、二級瀧附近の景

三、下段峽——南北直峽

四、二級吊橋下流の景

安藝の名勝二級峽及白糸瀧

五、白糸瀧

附説

一、動植物 二、厠穴 三、瀧 四、二級峽の特色
五、開發的施設 六、藝文 七、參考圖書

緒言

二級峽は安藝國賀茂郡郷原及廣の兩村に跨りて黒瀬川の下流に在り。白糸瀧は廣村白糸川に懸り前者の南西二・五紵に在り。前者は吳市の北東約六紵、廣村電車交叉點より北約四紵に當り自動車の便を有す。余は昨夏懸命により再度地方人士と共に實査の機を得たれば、茲に之を

錄して江湖諸賢の教示を仰かんとす。

總 說

一、地 形

安藝國の南東部に在る一地塊は、安藝賀茂及豊田三郡に屬する陸の大半部を包含し、南西北東及南東―北西方向の相直交せる斷層線にて圍繞せらる。即ち瀬野川沼田川及安藝郡の西海岸賀茂豊田兩郡の南海岸によりて略々菱形の地相を呈す。此地塊の中央より少し西方に偏し、約南西―北東方向の斷層線に沿ひ黒瀬川の貫流するありて賀茂郡を東西の兩部に分つ。西部には小田山(七二三米)灰ヶ峯(八一一米)聳へ、東部には石英斑岩の野呂山(九六一米)龍王山雲際に屹立し、北方に西條盆地横はり、南方に廣大川の沖積地發達す。黒瀬川は源を賀茂郡東志和村並瀧寺池に發し、川上寺西兩村を経て西條盆地を過ぎり西條川の名を得。御蘭宇村より郷田村に至りて勝景東子トウゴの懸瀑をなし。坂城村に入りて左岸に坂城川を合せ、黒瀬郷原兩村を流れ

て黒瀬川の名を得。郷原廣兩村の境界を中心として峽谷を形成し、茲に所謂二級峽の名勝をなす。暫にして右岸に一支流白糸川を入れる、これを溯れば所謂白糸瀧懸る。更に下流は廣大川と稱し沖積地を流れて廣灣に濺ぐ、流程四十軒。水量は相當なるも郷原の二瀬に堰堤を設け、川の左岸に添ひ導水渠を穿ち、二級峽尾の廣發電所に送水せるため峽中の減水を見る、されど増水時には清水滔々轟々壯大の景觀を呈す。

二、地 質

黒瀬川は花崗岩地に發源し、沖積地の西條盆地を流れ、郷田の洪積地に入り、更に黒瀬郷原の狹長沖積地を流れ、次いで郷原僅少の洪積地及郷原廣兩村狹少の花崗岩地を横斷す、此花崗岩地は二級峽にて、節理よく發達し互に直交し方狀節理を呈する所あり。又其組成に粗密硬軟あり、爲に流水の浸蝕を受け、峽谷瀑布甌穴急流深淵等を生成し、瀑布に二級瀧堂々瀧の壯觀をなすあり、甌穴に大小百五十の畸形をなすも

のありて、學術及風景上大なる價值を認む。二級峽盡くれば此川は廣の石英斑岩地及沖積地に流下して海に入る。

三、名稱及區域

二級峽は二瀬の堰堤より發電所下の二級吊橋迄一六六一米（十五町餘）間の峽谷を指稱す。此峽は二級瀧より上流と下流とに於て各々一段（級）をなし、且二級瀧は其代表的巨壁なれば、其名稱に因みこを表し地形と瀧名とにより其名を得。此峽は上段峽下段峽及其間の二級瀧の三區域に分ち、上段峽は堰堤より二級瀧頭迄、下段峽は二級瀧壺末より二級吊橋迄とす。尙上段峽は上部を弧狀曲峽、中部を東西直峽、下部を南北直峽と名づけて説明に便す。下段峽も亦南北直峽をなす。次に二級瀧も亦上段瀑狹間峽及下段瀑の三に分つ。尙此文中の數字は大部實數を示す。

各 說

一、上 段 峽

安藝の名勝二級峽及白糸瀧

此峽は堰堤二級瀧頭間一一七九米の長さを有し本峽中の大部を占む。花崗岩の河床は低く傾斜し、清流は所々奔瀨青淵を作り、巨岩は所々に横はり、甌穴の奇形をなすもの存し。兩岸は綠樹茂り、水態石容及林相美の鑑賞すべきもの多し。此峽の上部は殊に二瀬峽の呼稱あり。

A、弧 狀 曲 峽

堰堤。石をコンクリーにて固め河水を堰き起電の用に供す、其長さ一二四米、高さ及上幅共に二・三米、排水閘門及水の調節機を備ふ。堰堤内の左岸には白砂廣く横はりて散策遊樂に適し、直に田園に接するも、右岸は流路をなし清水漫々遊魚を認め、松杉の綠樹は其上に繁茂し左右別異の勝景を表示す。碧水は滔々流れて左岸の溝渠に通じ發電所に至る。若し流水満漲せば蕩々堰堤を飛躍して廣瀑一齊に懸るの壯觀を呈す。

此弧狀曲峽は長さ三〇二米、其岩盤節理略々直交をなす。之を北半と南半とに分つ。

北半。流水は東西節理に沿ひ深く岩盤の中央を浸蝕して河道を形成し、茲に節理及其交叉點を中心として二〇個の小甌穴散在し、其生成の初歩を示すもの少なからず、其大なるものも、徑〇・三米、深〇・四米に過ぎず。次に左右兩岸に峙つ岩盤は或は凹凸或は平面或は水平層を呈し或は長石の分解により小穴を穿ちて變態を示し其節理間には小松躑躅等點々生育して綠色を添ふ。次に流水長く湛へて三日月淵を形成し、長さ百餘米、幅二〇米、深二米。清澄鑑むべきの裡、巨岩及白砂横はりて更に景趣を加ふ。

南半。流水は略々南北(北二十度西)節理に沿ひ岩盤を浸蝕して河床を生成し、初は左右兩岸に沿ひ二條の流路をなすも、後に左岸の岩盤高まるに従ひ、單に一條の右岸流路を取り、淙々として奔下し、遂に鰐魚淵に入る。此淵は長さ百餘米、幅八米にて細長形をなす、中に鰐魚頭岩存するに因み名づく。

以上此峽の右岸は花崗岩壁に接して青松鬱蒼

相連なり。左岸は溝渠を隔て、田園に接し茅屋の點在を望み、次いで松林又鬱茂し翠綠將に滴らんとするものあり。

B、東西直峽

花崗岩は大石英粒多く、爲に白色を帶び、岩盤は約東西及南北の兩節理を有し、河床は東西節理の水蝕によりて略々一直線に東西に形成せらる、其長さ三一九米。之を瀬淵、堂々瀧、堂々淵の三部に分つ。

I、瀬淵部。此部は岩盤及流石多く、岩盤は右岸に高く水平層をなす所多く、流石は左岸に近く存在す。流水は東西、及南北の兩節理を浸蝕して縱横の方向を取りて奔瀨をなし、又所々小淵を作る。此勝景は階段的に漸次低く出現し來る。又岩盤中には多くの甌穴生成して奇觀を呈す。

甌穴。節理の一部又は節理の交叉部水蝕のため楕圓形又は圓形の穴を作るもの、此穴に礫砂入り流水のため攪拌を受けつゝあるものあり、

又花崗岩は成分粗密同一ならざる爲水蝕により穴を作れるものあり。此等の甌穴には生成の順序を示すもの、諸種の形態を呈するものあり。垂直的に見て其大なるものに、半臼形(長徑〇・七米、短徑〇・六米、深〇・八米、半ば欠損)皿形(直徑〇・四米、深〇・一米)あり。次に水平的に見て穴縁形の大なるものに、棗形(長徑一米、短徑〇・八五米、深〇・六六米)、藍饕形(長徑〇・四米、短徑〇・三米、深〇・八米)、德利形(長徑二米、短徑一米、深二・二米)、靴形(長徑二・一米、短徑一米、深〇・九米、底に砂石を埋む)等ありて水を湛ゆ。

佛淵。南北の節理間深く流水に浸蝕され、最深二・五米、紺碧靜寂の少淵をなす。傳説によれば、古昔大水に淵左岸の畑地崩壞に瀕す、之を防禦して此淵に溺死せし人あり、依てかく名づく。此淵に近き岩面には波狀の剝痕を留め蓮華の瓣狀をなし頗る奇觀を呈するものあり。

要之此部は瀾淵甌穴岩石美等の河床景に其特

色を有し。右岸は水平層の岩壁高く創立し、翠松は之に接して茂り。左岸は溝渠を隔て、一部岩壁の突出を見るも、大部は松樹鬱蒼たり。

ロ、堂々瀧。瀧頭の岩盤は一般に高く河床に堰堤狀に横はり、左岸五・五米間の低部に僅に水路を通ず、茲に一巨岩あり瀑水二分流す。一段瀑をなし、忽にして略々東西(北八十度西節理の方向)に轉流し、暫くして再び略々南北に流れ懸り第二段瀑をなす、以上の兩瀑はこれ左瀑なり、其水路は廣く深く浸蝕を受くる所あり。他の一は略々東西の方向を取り右岸に流れ懸る、これ右瀑なり。其中途に於て北三十度東—南三十度西の方向に分流し懸り左瀑中の第二段瀑に合する中瀑あり。左右兩瀑は遂に相接近し相並び右岸に偏する瀧壺に投ず。されば此瀑は正面瀑上下二段三條に懸り、節理に沿ひ生成發達す。幅一五米、高さ九・五米(斜高三三米)堂々喧號飛下頗る壯觀を呈す、故に此名あり。

右岸に近き河床岩に剝痕を認め、古昔瀧の存在及變遷を立證し得。又瀧の岩面には甌穴の存するもの多く、垂直的に見て箕形（長一・二米、幅〇・八米、深〇・四五米）のもの。水平的に見て楕圓形（長徑〇・三米、短徑〇・二七米、深〇・三米、底に砂礫あり、外に長徑及深共に一・二米、短徑〇・九米）、圓形（直徑〇・二四米、深一・一米、底に礫砂）等のものあり。

瀑水多き時は左瀑中瀑全く合して一條となり激流浩蕩喧騰頗る豪壯を極む。

瀧壺。長さ四六米、幅廣き所二〇米、深二米にて長さも深からず。瀑水飛躍白沫四散の勝景を翫賞し得。

觀望所。こは瀧頭兩岸の巨岩上及懸瀑正面の砂地を以て最とす、前者は部分的小觀に適し、後者は岩段、縱横の節理及其間に懸る左中右の三瀑を大觀し得。

ハ、堂々瀧。瀧壺の水は右岸に沿ひ悠々緩々流れ去り細長の瀧淵をなす。其中に巨大の茶釜

岩屹立す、こは略々正方形の花崗岩にて高さ三五米あり。左岸は白砂相連なり、之に續く青松と碧流との間に挟まれ、堂々瀧の雄姿を眺むるの適所なり。壯觀の動景に次ぎ清閑を展開す。此淵の盡くる所、右岸に手洗川の清流を容る。堂々瀧及淵の左右兩岸は亦翠松林立して河床景を裝飾す。

C、南北直峽

右岸手洗川口より二級瀧頭に至る峽谷にて、其長さ五五八米に達し、本峽中最長の地域に屬す。河床は漸次低下し巨岩瀧淵甌穴の見るべきものあり。兩岸の大部は岩壁峙ち、之に連なる樹林は蒼鬱として高く聳へ、更に幽邃の景觀を添ふ。

イ、上岩瀧、岩淵、甌穴。堂々淵盡き峽底傾き、茲に岩盤及流岩縱横に相並び、流水之に激し之を潜り之を超へ、轟々急湍を成し小瀑の懸るに似たるものあり、之を上岩瀧と名づく。次に之に接し此岩瀧と左岸流との間に中の島あり、

清水に圍繞され、奇岩聳立し青松秀で柳樹生育して一奇觀をなす。之に次ぎ岩淵あり、其上位は流石なるも、他は悉く岩盤に圍まれ、清澄鏡の如く遊魚を見るも、淵形大ならず。其周の岩盤には甌穴十四個を數ふ。水平的に見て圓形、瓢形、橢圓形（長徑〇・九七米、短徑〇・七米、深〇・五四米）。垂直的に見て漏斗形（長徑〇・五米、短徑〇・四米、底徑〇・一五米、深〇・八米）等あり。此淵右岸の大岩に水平的に見て橢圓形（長徑〇・八五米、短徑〇・六三米、底埋没す）等あり。前記左岸流は岩淵の下方にて本流に合す。

ロ、長瀬。前景に續き岩盤は高く右岸に峙ち、流岩は左岸に堆積して奇形怪狀を呈し、清水滔々其中央を流れ、或は岩に激して小湍を作り、或は滯みて小淵を作る。又岩盤の甌穴には、水平的に見て橢圓形（長徑一・二米、短徑〇・九米）及小圓形等數個あり。此景は總て前景に髣髴するも、稍々小なるの憾あり、されど諸景よく調和を保つの點に於て特色を有す。尙此瀬の右岸

には躑躅所々に生育して花時美觀を加ふ。要之此瀬は巨岩湍淵及甌穴の峽谷美を有す。

ハ、長淵。兩岸は岩盤發達し、淵は其中に在り。長淵の流水之に渦卷き紺青の漣をなす所あり。長さ六〇米、幅一二米、深〇・六米、長さにより名づく。岩面には岩松の生育せるものあり、淵末には亦甌穴存し水平的の橢圓形圓形のものを見る。

ニ、見返りの瀬及淵。長淵の下、左岸には岩盤高く（甌穴二個を含む）右岸には流石横はる、暫にして兩岸の岩盤其高さを増し、左岸に岩段三（甌穴一個を含む）を認め、白水淙々其中を流れて奔瀨を作る、こを見返りの瀬と名づく。之に次ぎ見返りの淵あり、長さ七五米、幅一四米、深一・二米あり、淵内には巨岩横はり飛石の奇觀を呈す。

ホ、下岩瀬、鏡淵。見返りの淵盡くるや、河床には大流岩夥しく、兩岸には岩盤表はれ、所々剝痕を刻し、流水は岩に激し岩を噛み急湍奔

第一圖 下岩瀬附近的甌穴群



瀬をなす、下岩瀬と名づく。岩盤上に甌穴多し

垂直的に見て、小甌形（直径〇・一五米、深〇・五四米）、白形（長徑〇・五米、短徑〇・四五米、深〇・二八米）等あり。水平的に見て、帽子形、蛤形、風呂釜形（長徑一・三米、短徑一米、深一・七米、底に砂礫あり）、達磨形（長徑二米、短徑〇・六八米、深一・七米、底に砂礫あり）、瓜形（長徑一・五米、短徑一・一五米、深一・三米、底に砂礫あり）、圓形（直径一・五米、底に砂礫滿つ）等あり、大なる標式的のもの多し。右岸には節理流水に浸され横穴狀をなせる所あり。尙蹕蹕所々に生育して花季其美を飾るあり。又左右兩岸に續く松翠は將に滴らんとして樹林の景觀を加ふ。

鏡淵は前者に接する深淵にて、白水滔々之に渦卷く。右岸は斷崖高く聳へ、綠樹は更に高く其上に茂りて淵上に投影し紺碧を加へ幽邃閑雅平靜鏡面の如し故に名づく。長さ四七米、幅一三米、深一・二米。

へ、小瀬及小淵。鏡淵の水は右岸の岩間を縫

以淙々流れて小瀾をなし小淵に入る。淵の左岸には大岩盤露はる。

ト、上段峽の概括。此域は一曲峽、二直峽より成り。曲峽の北半には多くの小甌穴と三日月淵存し、南半には鰐魚淵あり。次に東西直峽は瀬淵堂々瀧及淵の三態をなし、前者には大小甌穴の奇形をなすもの多く、中者は此域動的壯觀、後者は靜的清閑の白眉をなす。次に南北直峽には、上岩瀨及岩淵、長瀨及長淵、見返りの瀨及淵、下岩瀨及鏡淵等の瀨淵ありて動靜の連續を示し、大小各種標式的甌穴の存するものあり。各々其特色を表現す。

二、二級瀧

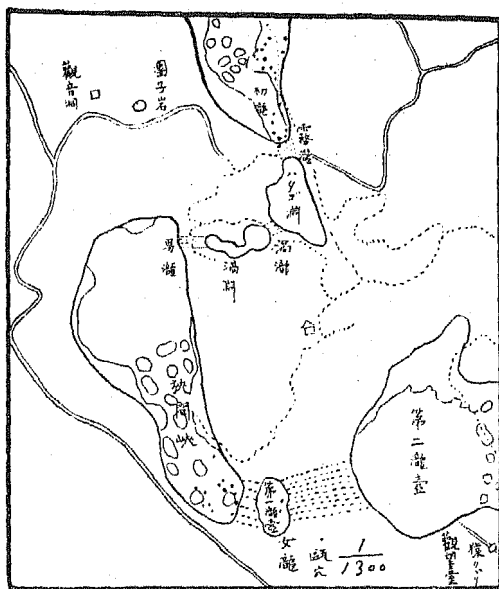
此は花崗岩の正面瀑にて上段瀑下段瀑の二に分れ、前者は初南北、後東西の方向に、後者は北西—南東の方向に懸る。尙兩者の中間に狭間峽あり。此域は曲峽にて長さ一九三米に達す。

A、上段瀑

全河底の大岩盤は左岸最低、漸次右岸に向ひ

安藝の名勝二級峽及白糸瀧

第二圖 二級瀧



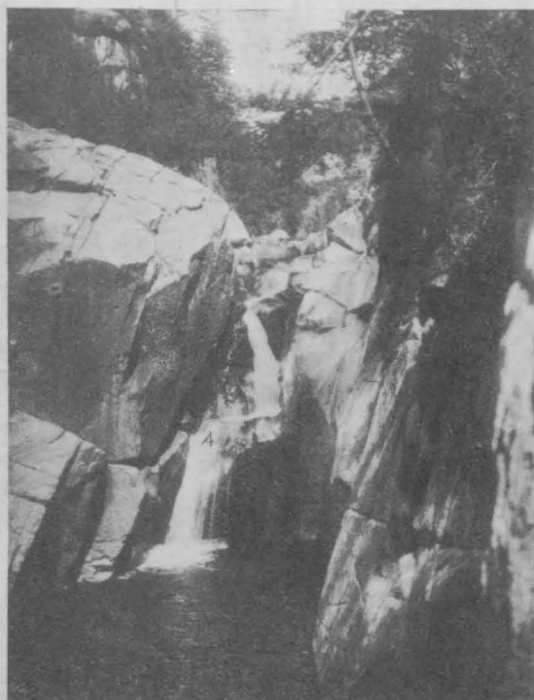
て高く、更に右岸に一凹所あり。其節理は概ね南北及東西を示して直交し、左岸の低所に瀧懸る。其瀧頭を見るに、上段峽最終小淵の水、流下して左岸に向ひ一小瀑をなす、これ初瀑にて高さ四米あり。此瀧頭には甌穴十個存し、大なるもの多く、水平的に見て、瓢形（長徑二・二米、

短徑一・三米、深一・五米)、薩摩薯形其他標式的もの多く一奇觀を呈す。此初瀑等の水、暫く流れて左岸の低所に霧瀧を作る。

イ、霧瀧。三段瀑をなす。瀧頭より其構造を瞰下するに、其岩石は略々南北(北十度東)及東西(北八十度東)方向の兩節理を有し、瀧は岩

石浸水のため南北節理間に生じ、東西節理面に懸り、所謂方狀節理間に在り。減水時は瀑水二條に其兩端に懸り堂々一大甌穴に飛射す、これ第一瀑なり。次に此水再び一條に飛下して又大甌穴(深二米)に激射す、これ第二瀑なり。次に此水三たび一條に飛躍し轟々ハタゴ淵に渦卷く、これ第三瀑なり。本瀑の總高十

第三圖 霧瀧及ハタゴ淵 (南より望む節理と剝痕とを認む)



米、幅五米。更に此瀑正南の岩壁(觀音岩)より仰視するに、瀧の第一段は斜に、第二段はそれと反對の斜に第三段は殆んど垂直に、即ち全體は<一狀に懸り、深淵に奔騰し白煙濛々霧を生ず故に此名あり。其實況は名勝三段瀧を縮寫せし景觀を有す。増水時至れば水勢蕩々一段一條の長瀑布に變化し雄壯を極む。尙此瀑の兩岸壁には所々剝痕又は甌穴欠損の存在を見る、こは又昔時の河床を

表はし、流水の下方浸蝕と瀧の退却とを立證し其變遷を語るものなり。現今は壯年期の秀景に屬す。

ロ、ハタゴ淵。旅籠^{ハタゴ}は昔馬の飼料を盛る旅行用の籠にて、これに似たるより名づけしか。略々平行せる南北及東西の方狀節理間に生成せる深淵にて、南北に長く梯形狀に似たり、最長の東邊一八米、最小の北幅五米、深八・六米に達す。減水時に於て半は白濁半は青藍、動靜の兩態を兼備するも、増水時には悉く白濁飛躍の壯觀を呈す。

ハ、渦瀧、渦淵、龍の口、男瀧。此等の勝景は何れも水浸のため東西の方狀節理間に生成せるものに屬す。

渦瀧。ハタゴ淵の水流れて南北の節理面に懸る、其面の兩端は二條となり、九米を飛下して轟々淙々瀧壺に注ぐ。こは大甌穴にて長徑五・五米、短徑四・五米、深八米に達し、凄蒼神を寒ふす。

渦淵。前の瀧壺に接し瓢形をなす。大水時渦旋を畫くの奇觀を呈するに因り此名あり、長さ一二米、幅五米、これ本峽最大形全國稀有の大甌穴なり。

此淵及渦瀧壺直上の高さ左右兩岸に大剝痕あり、又此淵の低き左岸に三大甌穴の欠殘存するを見れば、是亦流水の下方浸蝕及瀧の退却を想起せしむ。

龍の口。渦淵の水は岩穴所謂龍の口を突出し男瀧として懸る。龍の口はヒサケノ口ともいふ樋(節理)の裂けし口の意にて、水平面と三十度の傾角を有する節理は浸水作用により横の甌穴を成し、略々五角形を呈す。其穴直上の大岩は小天然橋にて、其長さ六・七米、高さ四・七米、幅三・二四米あり。此横甌穴及小天然橋は實に全國稀有の奇觀たり。

男瀧。龍の口迸出の流水一條に南北節理面に懸る。幅三・二四米、高さ七・三米、白水淙々一齊に飛下し頗る勇渾壯觀を極む。其瀧壺は楕圓

形をなし、長徑四五米、短徑四三米、白沫沸騰堂々四近に轟く。増水時には流砂其半を埋む。尙此淵には右岸に千里穴と稱する洞窟あり、入口狭きも内部は廣く深しと云ふ。

以上ハの秀景は近く渦瀧頭及小天然橋上より遠く男瀧壺西方の高所より眺望し得。増水時には渦瀧は一條に懸り、其瀧壺と渦淵とを合一して大渦旋を畫き、又小天然橋を超へ男瀧壺に大渦を卷き大偉觀を呈すと云ふ。

ニ、大水時懸瀑。若し夫れ大雨至り川に満水せば、瀑頭右岸の凹部普賢の鼻に溢水して男瀧淵に落下し、茲に一の白瀑懸り壯觀を呈す。かくせば此瀑及前記の諸瀑に圍まれて一の中島を形成するに至る、これ所謂上中島なり。

ホ、上中島。こは大花崗岩塊なるが、高所に僅に平坦面を有する外は傾斜面をなす、面上の節理間には所々偃蹇たる松樹の生育せるありて其綠色は白岩に對應して美觀を添ふ、此岩塊は之を繞る瀧淵の觀望に適す。

へ、概括。上段瀑は南北及東西の方向を取り方狀節理間に形成し、初瀑霧瀧渦瀧男瀧の四瀑にて、高さ三〇米餘。又甌穴に渦瀧壺渦淵龍の口の大きなものあり、就中渦淵は大きなに於て、龍の口は横たるに於て、全國稀有のものに屬す。尙瀧頭には標式的甌穴多く存す。

B、狹間峽

男瀧壺の末より岩盤及流岩多く出現し、川床急に傾き流水は其巨岩を潛り之を超へて小湍を作り峽尾(所謂岩鼻)に至る。此三三米間を狹間峽と稱す。こは上下兩段瀑の間に在りて本峽中の最狹部をなすにより名づく。其流岩に甌穴殘痕を見るは、上段瀑等上流岩盤の甌穴を含むものが流水に破壊流轉せしに由る。峽尾に近き岩盤には甌穴相群がり其數十數個、其形の美且大なるもの七、佛生七洞と稱す。垂直的に見て、臼形(長徑二米、短徑一・六米、深三米)のものあり。水平的に見て、卵形(長徑一・二米、短徑一米、深二米)、圓形(直徑〇・七米、深一・二米

ハート形、楕圓形（長徑二米、短徑一・二米、深一・五米、底に砂礫あり）等概ね標式的ものに屬す。就中最下のものは潜龍洞とて白龍潛み下流の芳ヶ淵に通ずる傳説あるものにて、嘗て其深四米迄測り得其以下未知數なりしことあり、余等の實査時は砂礫に埋れ眞深を測り得ざりしを憾む。此峽の左岸は男瀧の懸る南北節理面を現はすも、岩鼻に近くに從ひ西に觸れ、岩鼻にては北西の節理をなし屈曲し、この方向に女瀧を懸く。

C、下段 瀑

イ、女瀧。上下二段に懸る故に狹義の二級瀧とも云ふ、又佛生瀧とも云ふ。これ亦略々東西の節理面に懸る。

上瀧。岩鼻の後方より兩分せる流水は破損せる幅一・三米の東西節理面の兩端の低所に懸る。其二條瀑の高各々二・一米に達し瀑水滔々殷々相共に第一瀧壺に飛下す。こは深からざるも其中に二個の甌穴存す。

下瀧。第一瀧壺の水は一條に流れて東西節理面に懸り、侃々囁々飛躍し、遂に第二の深淵に入る、其高さ二・二米に達し、上瀧の高さを合せば四・三米にて、名勝三段峽の代表三段瀧の三〇米を超ゆ。上下兩瀧共に剝痕の多數を認む。

第二瀧壺。大圓形、直徑三・三米、深五米に達する碧潭。瀑水の投ずる所、白泡卷騰、水煙濛々、白水の飛瀑と相待ち一大偉觀を呈す。此淵の周殊に其末邊には流岩岩盤層々相並ぶ、就中雨乞岩（祈雨に用ふ）上は此正面瀑觀望の最適所なり。又此淵の西方に巨岩觀瀧臺あり、是亦觀望の適所なり。

増水時に上瀧に於ては、流水悉く岩鼻を蔽ひ白綿の一齊に落下するが如く、其低所は殊に連續して之を繰り出すに似たり。第一瀧壺の猛撃は白綿悉く沸騰するに髣髴たり。次に下瀧に於ては、白綿更に廣く飛下して深潭に跳躍廻旋堆積するの壯觀を呈す。又瀑聲轟々滔々山谷に響き渡り百雷の一齊に下るが如し。

ロ、大水時の懸瀑。大雨至り上段瀑に満水せば溢水はハタゴ淵より南方の凹部を超へ所謂白瀧となり、轟々下瀧第二瀧壺の一隅に注ぐ、爲に之と渦瀧男瀧狭間峽下段瀑とに圍まれ又一の中島を形成す。これ所謂下中島なり。

ハ、下中島。こは三斜面を有する岩塊なるが、東西及南北節理よく發達し、松及潤葉樹其上に茂り、又頂には一字淺草觀音ありて美裝を添へ變化を與ふ。これ瀑中第一の觀望所にて、瀧の全景、瀧上下の峽谷、其他四邊の秀景を眺め浩然の樂を養ひ得。

ニ、觀望所。御上覽所は女瀧の東北方に當り廣西條街道に沿ふ高所にあり、高さより低きに向ひ正面女瀧の全貌を一眸に俯瞰し得る絶好の最適所なり。又其南方の路傍にも同様の觀望所あり。

D、二級瀧附近の勝景

團子岩。上中島北西方の斷崖面に裸出す、上下二岩相重なり團子狀をなす故に名あり。兩岩

間に廣場あり、幅三米、長さ三・六米、夏季清風徐に起つて衣を拂ひ、四邊の瞰下に適す。

觀音洞窟。前者の西方男瀧壺の北方に在る小洞窟にて、長さ五・四米、幅二・三米、高さ四米、其奥に觀音の石像を安置す。

洞窟。ハタゴ淵の東方に於て、羊腸たる路傍に沿ひ洞窟あり、入口一米四方、穴の長さ四・五米、高さ一・七米、是亦觀音の石像を安置す。

三、下段峽—南北直峽

第二瀧壺の盡くる所より二級吊橋に至る南北直峽を指稱す、其長さ二八九米に達し、兩岸斷崖峭立所謂眞の峽谷美を見る。

イ、霧ヶ瀨。初は巨岩累々相重なる、流水其間に小湍を作り奔瀨をなし韃轂たり、霧四時絶へざるによりて此名あり。

ロ、清風潭。前者に次ぐ青潭にて、南北節理に沿ひ長く其方向に形成せられ、末に石堰を設く、清水洋々深き所人身を沒し紺碧藍の如く、泳ぐべく扁舟を浮ぶべし。

ハ、二級吊橋。前者の南少許に新に吊橋を架設しつゝあり、二級橋と名づく、長さ四四米、完成せば更に一段の風致を加へ又探勝に至便を與へん。此橋の上方には巨岩の横はるものありて、或は馬に類し馬石と稱するもの、或は岩上節理間に小松秀で岩石美を飾るものあり。

ニ、右岸の景。霧ヶ淵の右岸には水涯に巨岩横はり青松秀で、中に猿ヶりの奇岩ありて潜行し得。少し南下せば、水邊に近く御上覽所あり、藝藩公嘗て附近の風景を上覽あらせられしに因み名づくといふ。其以南緑樹茂り幽邃の光景を添ふ。

ホ、左岸の景。左岸は花崗岩直立の大絶壁にて翠松之に繁り交ふるに檜楓躑躅等を以てし一段の修飾を加ふ。巨岩は所々樹間に隠見し鏡面に似るもの、節理を表はすもの、崩落の状をなすもの、重ね岩等頗る諸態を呈す。

障子崖。高所の岩崖障子状をなすにより名づく岩壁面の一奇觀なり。

釣鐘岩これ亦高所に在り、水平節理ある重ね岩の上部に大鍾狀岩懸る故に名あり、これ亦一奇觀なり。

佛岩。岩塊佛に似たり、故に名あり、高さ六米。

くべり岩。くべり抜け得るにより名づく。

十二級瀧。發電用水道の水は發電所に近づきて餘水を二所に放落す、この水各々瀧を作り左岸に落下す。一は水量少なきも、一は大にして人工的大瀑布をなし十二段をなすにより十二級瀧と名づく、瀑水澎湃險崖に懸り半以上は二條に分る、全高九十五米に達し、屢々巨岩を猛撃し方向を轉じ千變萬化の妙を極め雲霧至る所に生じ、瀑聲侃々轟々殷々奔雷の轟くに似たり。蓋二級瀧と相對し二大偉觀をなす。

廣發電所。斷崖の盡くる所に在り、人工の一美觀を呈す。

第一發電所。南方のもの、和洋折衷建瓦葺平家、間口一六米餘、奥行一〇米餘、軒高四米

餘。

第二發電所。北方のもの、建物前者と同様、間口二〇米、奥行七米餘、軒高四・五米。

沿革。明治大帝日清戰役に際し大本營を廣島に進めたまふ、廣村長藤田氏天機奉伺に參向、一夕芳川内務大臣に二級瀧を談ず、水電を起し工業振興を計るに如かずとて、澁澤榮一氏に謀り、第一發電所は明治三十年十二月起工、同三十二年三月竣工。其設備二百五十「キロワット」三臺なりしが、大正七年十月、三臺の内二臺を

撤去し五〇〇「キロワット」一臺を設置す。有效落差は八一・八米、水車はペルトン種に屬す。第二發電所は大正二年十二月、前構内に別に建設し、四四〇KVA發電機二臺を据付く。有效落差前者に同じく、水車はフランス(横軸)種に屬す。最初吳廣島兩市に送電し、漸次他の發電所の新設と合併とを經、廣島電氣株式會社となる、されば廣發電所は其濫觴をなすものなり。以上記述の二級峽は名勝の價値十分なりと認む。(未完)

火山學說史 (六)

山田節三 譯

五、十九世紀中葉以來の火山學

十九世紀の中頃火山現象の原因に關して全く新しい思想進展が明るみに出された。實際、當

時の多くの地質學者にあつては、地核が灼熱流動性であると云ふ見解が引き續き保持され、そして亦、ホプキンス(W. Hopkins—Philosophical